

やすいので、煮込む時間の調整が必要である。

4) 耐病虫性

病害虫抵抗性では、ジャガイモシストセンチュウ抵抗性遺伝子(H₁)を有する。ウイルス罹病時の主な病徴は漣葉モザイク症状で、Yモザイク病抵抗性は「デジマ」並の“中”である。粉状そうか病抵抗性は“中”である。疫病圃場抵抗性および疫病による塊茎腐敗抵抗性は「デジマ」より弱い“弱”である。暖地における重要病害である疫病、そうか病、青枯病には弱いので、健全な種いもの使用と、基本的な防除が必要である。

4. おわりに

ばれいしょを取り巻く情勢は、国産需要の減少と輸入量の増加、価格の低迷、産地間競争の激化、生いも輸入圧力の増大など厳しいものがある。その中で「アイユタカ」は、長崎県においてはニシユタカ以来25年ぶりに奨励品種に採用され、将来を担う品種として期待が高まっている。今後の普及に向けて取り組むべき課題として、一期作産種いもを用いた栽培方法の確立、貯蔵特性の把握などが残されている。

「アイユタカ」の育成者として、外観や調理特性を生かした有利な販売と消費拡大により、生産者と消費者の両方に貢献できる品種に育つことを期待したい。

サルのたき火

愛知県犬山市にある日本モンキーセンターには、チンパンジー、ゴリラをはじめ、世界の珍しいサルが飼われ、霊長類の研究が行われていますが、ヤクニホンザルの大きな屋外飼育場では、年末から次の年の2月はじめ頃まで、たき火にあたるサルの姿がみられます。丸太を何本も燃やし、半ば赤い“おき”ができる頃には、大小さまざまなサルたちが火を恐れず、あるいは前を向き、あるいは背中をあぶり、また2、3頭づつ抱き合いながら周りに集まっています。寒いこの時期、サルたちにとって暖かい火は何よりのプレゼントですが、それだけではありません。丸太から立ちのぼる煙が淡くなり、飼育係が鉄の棒で赤くなっている炭を掘り起こすと、中から丁度よく焼けたサツマイモが、ころころと幾つもとび出してきます。サルは心得たもので、

何分か経って表面のほてりがおさまったころ、素早くイモを拾い、あるいは高い木の上ののぼり、あるいは小屋に入り、上手に皮をむいて頬張りはじめます。見ていると、向かい合って食べることはなく、みな背を向けているのが微笑を誘いますが、百頭ほどいるサルのなかには、たき火にもあたらず、イモも拾わず、悠然と構えているものも結構多勢います。お腹がいっぱいなのでしょう。それとも焼きイモがあまり好きではないのでしょうか。

(編集部)

